

# 日本万国博覧会

稲井 信雄

大阪市の中心から北へ約 15km 六甲山系を背景に遠く大阪湾を望み 名神高速道路沿いに広がる千里丘陵ではスリパチ型の地形が巧みに生かされ その広さ約 330万 $\text{m}^2$  (約100万坪) におよぶ広大な土地に 世界の注目をあびる人類の祭典 日本万国博覧会が1970年の春から花々しく開催されようとしている。

この万国博覧会々場の地盤は地質的にみると 大部分が大阪層群と呼ばれる第四紀洪積世前(約200~500万年前)に生成された地層によって占められている。 もっとも一部丘陵の谷間部や山腹斜面では この大阪層群を被覆している沖積相当層である河底堆積物や崩土が分布している。

いまこの地に快適で調和のとれた理想的な設計がほどこされ その中心に人類の交歓の場として お祭広場が建設されようとしている。すでに土地造成のブルドーザーは夜となく昼となく けたたましい音をたてて その一部を削り 低きを埋めて造成工事は進められている。以前この地は数m~数10mの起伏のとんだ丘陵で これに雑木や竹藪が茂り 見透しの全然できなかった土地であったものが 今では広大なスリパチ型に造成され もとの地形は周辺山地にその起伏の高低をとどめているに過ぎない。

## 大阪層群

大阪層群というのは大阪平野周辺部の丘陵地を構成している地層の総称で かつ大阪平野を充填する地層群で

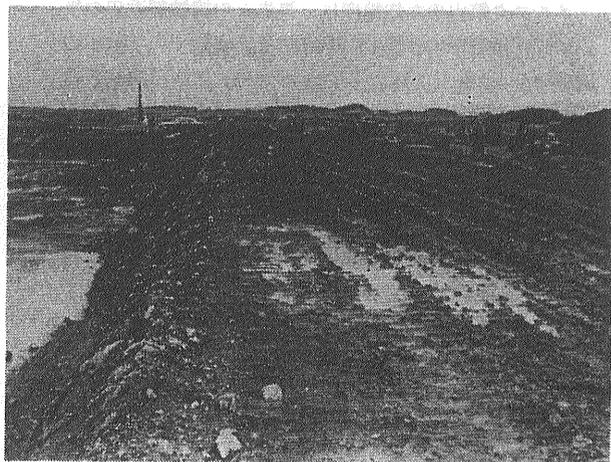
大きな体積を占めている。未固結でかなりルーズな粘土 砂 礫の堆積岩で構成され 中でも千里丘陵には下位の地層からその上位の地層まで 連続的に分布しているので この地帯が大阪層群の模式地として層序研究の発祥地となっている。

以前この地層群は厚さも 100m にみえないものとして その重要性もあまり認められていなかった。ところが昭和24年頃から大阪盆地の天然ガス埋蔵の可能性が問題となり 当時の地質調査所大阪支所において 京都・大阪各大学の応援を得て この博覧会敷地周辺のみならず大阪平野をとりまく付近の地質調査 ならびに試錐調査が開始され その中で大阪層群の概要が 次第に明らかにされてきたのである。

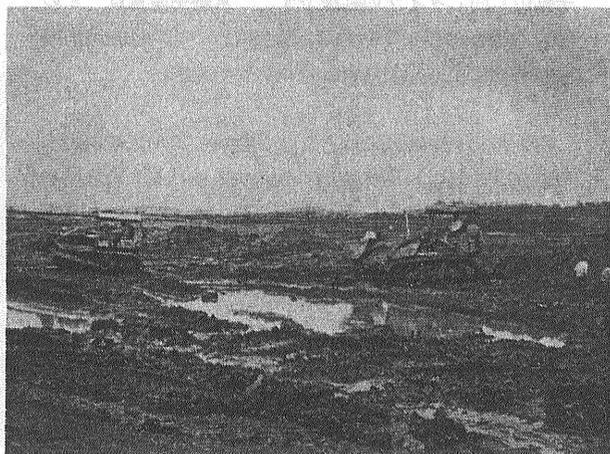
大阪層群は前述のとおり未固結な堆積岩からなり その層厚はかなり厚いものであることが 重力調査や 試錐調査の結果で解明され その中部に層厚0.2~0.5mのアズキ火山灰層とよばれる凝灰質の地層が分布している。

この層は連続性に富み分布は広く しかも特有な色を呈しているので重要な鍵層になっており 大阪層群をこれによって上部と下部層に分けている。このアズキ凝灰岩層より下位に これも連続性のあるピンク凝灰岩層がある。これも前者同様よく連続する。

このアズキ凝灰岩 凝灰岩層の露頭が 八丁池周辺やその西部地区に発見され 追跡ができたのであるが 今では順次削りとられて 大部分がその跡を消して



万国博覧会造成工事(その1)



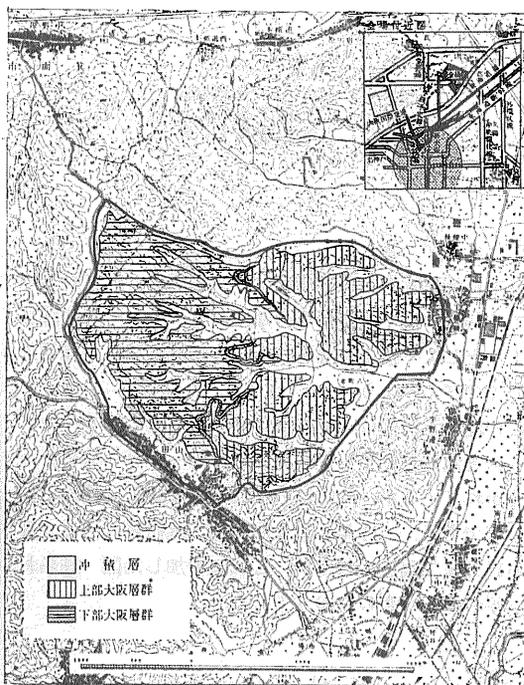
万国博覧会造成工事(その2)

ゆく。博覧会ができ上るまでには崖には芝生が張られ道路は舗装されて地質の現況は跡形をとどめないだろう。

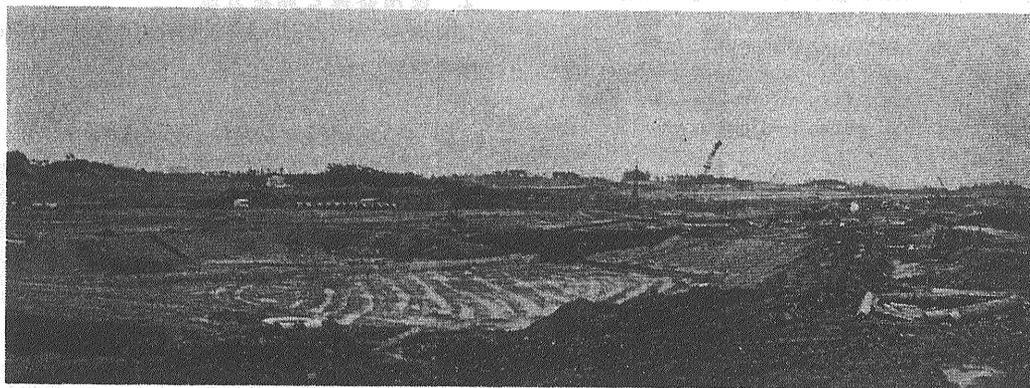
(筆者は 大阪出張所長)



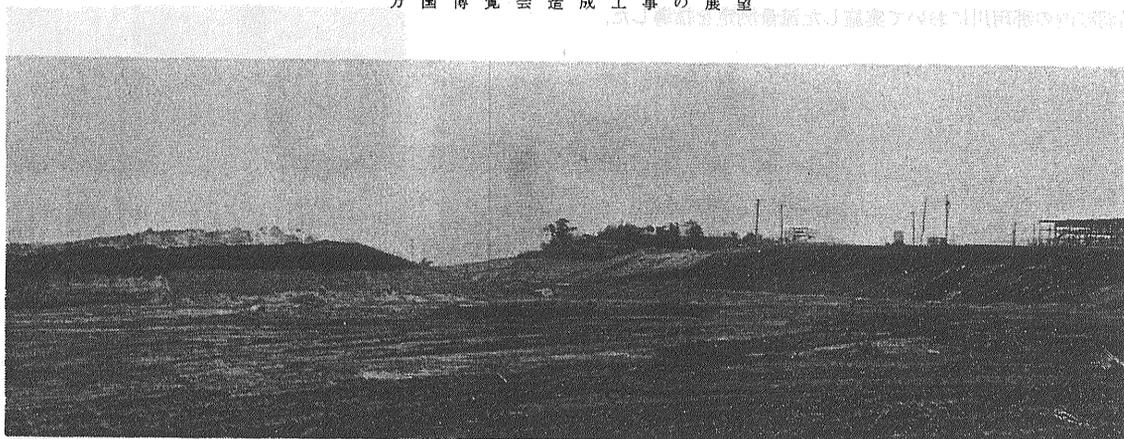
万国博覧会場内の大阪層群 (その1)



第1図 会場敷地の位置図



万国博覧会造成工事の展望



万国博覧会場内の大阪層群(その2)